
Millennium of Vengeance **尊の美人ハンターコンビ**

猿道 忠之進

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Millennium of Vengeance 噂の美人ハンターコンビ

【Nコード】

N5049Z

【作者名】

猿道 忠之進

【あらすじ】

戦乱の大陸バストニア大陸。かつて、この大陸では危険動物と呼ばれる動物が異常繁殖し、大陸の人々はそれら危険動物に対抗するために、危険動物を狩る者「ハンター」として起用していた。そこで活躍したハンターが国という枠組みを超えて、一つの組織ドリークというものを作り出していた。

そんな、大陸の東部にあるグイディッシュ王国の中、一人の新米ハンターが胸を躍らせていた。彼の名はウィッシュ・クレツィア。ドリ

1クの教育訓練を終えたウィツシユは、先輩ハンターの発表を得て、担当の先輩ハンターの元に付くのだが……。憧れの先輩ハンターは、実はとんでもない人だった？

冒険活劇風狩人ファンタジー？ が今始まる。

世界観は戦場の鎮魂歌と一緒にです。

駄文ですが、読んで頂けると嬉しいです。コメント批評などをくれると、なおのこと、更に嬉しいです。気軽に誤字脱字などご指摘ください。

プロローグ

プロローグ

雪で覆われた白銀の森の中は、いてつく寒さが支配する。

人が吐く息は白い蒸気となっては、空中に消え去っていく。

この寒さの中でも、自然界の厳しさは慈悲という言葉を知らない。弱った者は寒さで死に、あるものは徘徊する肉食獣に食され、あるものは森の中で朽ち果てて植物たちの養分となる。

人の手がほとんど加わらないこの世界では、力こそがルールであり、狩りを行うハンター達にも例外はない。

寒さのせいもあってか、森の中を切り開いた道は人間も滅多に足を踏み入れたりはいしない。足を踏み入る者といえば、ここを道に使う商人達か、仕事で来ているハンターくらいのものだ。

そこを二人の女性が武器を背負って歩いていた。

薄らと道に積もった雪の上を歩いていく二人、道には二人が来たことを印していく足跡が残されていた。

一人は茶色ロングヘアの女性で手に槍を持ち、もう一方の薄緑の髪の毛の女性は矢筒を肩に背負って手には弓を持っている。

「新年早々、禁猟区警備を任せられるなんてね……」

弓を持つ女性は辺りを見回しながら白い息と共に愚痴を吐き捨てた。

「まあねえ、仕方ないよ」

槍を持つ女性は溜息をつきながら横目に呟く。その顔に陰りが見えた。

「上の命令だし、仕方ないか。でも、この仕事、報酬のわりに合わない仕事だわ」

「密猟者達が盗賊ってこともありえるからね」

二人は退屈と言わんばかりの表情を顔に浮かべて、道を歩き続け

る。

二人は年の明けたその日にギルドから呼び出しをくらい、誰もが嫌がる仕事を押し付けられたのだ。

同僚たちの間では巡回とよばれている仕事で、禁猟区はこの森で狩りをする無法者がいないかの見回りだ。だが、その無法者がただのハンターや貴族ならばまだいいが、正真正銘の無法者の賊が、違法な狩を行っていることもある。

二人はハンターとはいえ女性であり、賊達の前を歩いていけば誘拐してくださいといっているようなものだ。愚痴を言わずに黙々と仕事をする事など、できるわけがない。

二人は愚痴をこぼしながら歩き続けたが、これといった変化はななく目に入るものは同じものばかり、雪を被った木々に背の低い雑草だけである。

「これだと、動物もいないわよ」

弓を持つ女性が言うと、槍を持つ女性は疑問を投げ掛けた。

「そうかな？」

「違っつて言うの？」

「ちゃんと見れば、動物がいた跡くらいは見つかるはずだよ」

槍を持つ女性は肩にかかる長い薄茶色の髪の毛を振りのけると、前方を指し示した。

目を細めて見つめる弓を持つ女性は、一步一步前に踏み出して行き、指を差す方向に向かい近付いていく。

彼女の指先は小さな黒い粒の塊を指し示していた。それは草の根元であり、近寄って確認しなくても小さな動物の糞ということわかった。

「まあ、あの距離でよくみつけたもんね」

「一端のハンターなんだし、この程度の動物の糞くらいは見つけて欲しいなあ」

薄緑の髪の毛の女性は、黒い粒状の糞をしゃがみ込んで見つめる。それに対して、ゆっくりと近付いていく茶色の髪の毛の女性は、い

かにも不満そうな表情を浮かべていた。

腕組をして弓を持つ女性の後ろに立った彼女は、新芽の様な色をした髪の毛を見つめながら思う。

(私にそう言ったのはあなたでしょ?)

「にしても、ほんとに大分やれる様になったじゃない、これキャロールの糞よ」

薄い緑の髪の毛の女性は、急に立ち上がり、茶髪の女性に顔を近づけて笑顔を浮かべた。

茶髪の女性はそれを見て、善からぬ不安に駆り立てられていた。

「この様子だと、まだ遠くないし、やつちやおう！」

子どものように無邪気な笑顔を浮かべる彼女だが、その発言の内容は全くその逆を指し示していた。思わず苦笑を浮かべた茶髪の女性は心底、彼女のこの罪悪感のなさに呆れることがある。

いくら力が全てモノを言う世界とはいえ、依頼とは全く関係のない狩りはしない。その上やったとしても労力の無駄と言う物である。だが、薄緑の髪の毛の女性は金目の者となると、見境なく行動を起こしてしまう。

「そのキャロールは、私達を守る動物の対象よ。狩るのはだめ」

呆れ半分、怒り半分の心境で茶髪の女性は、相方の女性の腕を掴み引き止めた。

腕を引つ張られた薄緑の髪の毛の女性は顔を後ろに向け、不満をそのブルーの瞳でうつたえ掛けた。しかし、その程度で茶髪の女性は、譲りはしない。固い信念を持つような視線を送って無理やりに引つ張っていく。

彼女にとってはこれが初めてではないし、このようなことは日常茶飯事で慣れきっている。

「分かったわよ……。諦めればいいんでしょ！」

薄緑の髪の毛の女性は、捕まれた腕を振りほどく。そして、森に踏み入れようとしていた足を、再び雪が薄らと表面に敷き詰められた道に戻した。

彼女が潔く諦めたため、茶髪の女性は何故か残念な気がしてならなかった。もともと、この仕事を望んでいたわけではないし、とにかく破格の安日給の仕事だ。

プラス の収入が欲しいのだ。

もし、相方が駄々をこねるようならば、自分もそれに便乗していた。

だが、そんな考えは彼女の頭から消え去る事になる。

「ちょっとアレ見て」

相方の緑髪の女性は慌てながら、指をさす。その先を茶髪の女性は目を細めて見つめた。ちょうど先ほどとは全く逆の構図で、茶髪の女性は一歩一歩足を踏み出して近づいていく。

だが、今回は全く状況が違った。

茶髪の女性は顔を引締めて、背中にある槍を手に持ち変えていたのだ。

「これは……」

しゃがみ込み地面に刻まれたモノを見つめて、茶髪の女性は鳥肌を立てた。そこに刻まれていたものは、無数の馬の蹄の跡だった。

第一章 新米ハンター 1

古代から人々は戦うことで文化を広め、また、技術を発展させてきた。

このバストニア大陸全土を統一していたロンディニア帝国が分裂して千年余り、大陸の中には文化が異なる大小様々な国々が溢れかえり、各地で国家間の戦争が勃発していた。

その中で、大陸東側は他の地域に比べ、比較的安定していた。

だが、その安定もバトア暦千五百年代に崩れ去った。

大陸東側の陸軍大国のグイディシュ王国が、かつてのロンディニア帝国の幻想にとらわれ、大陸を統一しようと、軍を動かしたのだ。その結果、バストニア大陸東側全土を巻き込んだ、三十年あまり続く戦争を生み出した。戦争は長期にわたり続いたが、大陸東部の島国、ギルデロイ帝国が戦争に介入し、一応の決着をつけた。

その戦争の影響により大陸各地で凶暴な動物達が繁殖の限りを尽くし、各地で人々を襲うようになっていた。だが、人々も無力ではない。

それに対抗しうるための武器をもち、動物達を狩る力をもったのだ。

その凶暴な動物達を狩ることを家業としている者を、人々はハンターと呼んだ。

国境をこえ大陸の危険動物を退治している彼らは、ドリークと呼ばれる組織を設立し、各地に部署を設置して動物達の動きを監視するようになる。それは国境なき会社ともなっていた。

バストニア大陸の東南部にあるグイディシュ王国の首都フロイワにも、当然ハンター達の集まるドリークがある。

締め切られた窓のカーテンの隙間から漏れ出た光が、目を突き刺している事に気付いて、青年はベッドから起き上がった。

いつもならばぼやけて見えるはずの視界も、この日は珍しくはっきりとしていた。無駄に広い部屋の隅から隅までを見渡せる。

木のドアで閉め切られたクローゼットに、フローリングの床、殺風景という言葉が最も似合うこの部屋とも、近いうちにおさらばする予定である。

青年はベッドから起き上がり、今まで筋肉痛だった部分をさわってみる。ピークの時に比べれば痛みは治まっている。

彼は布団をどかして枕元にさす光の光源を見つめ、立ち上がって窓の前まで歩く。そして、カーテンを開けて外を見た。

朝日が昇り始め、レンガ造りの家々の天井を明るく照らし始めている。いつもと変わらない街の夜明け、目抜き通りに目をやれば、露店商人たちが店の開店準備に追われているのが見えた。

そんな穏やかな風景とは対照的に、青年の胸は高鳴っていた。厳しい訓練を耐え抜いて、希望と冒険心を胸のうちにくすぶらせているのだ。

大きく深呼吸して気持ちをおちつかせると、青年は鏡のほうへと向かう。椅子に腰を落ち着けて長いとも短いともつかない栗色の髪の毛を、鏡を見ながら解きほぐしてから整えていく。

誰かに見せるわけでもない。だが、人前に出る以上、身だしなみはきつちりとしておかなければ気がすまない。

青年は髪の毛を整え終わると、洗顔を行うために洗面所に向かうために立ち上がる。それと同時に木の擦れる音が背後で響く。

彼が振り向くと、ドアの前の人物と目があい、少しの間動きを止めていた。

彼の目の前には、白と黒のフリルのついた侍女の衣装に身を包む女性が立っていた。その女性は、白い肌を急激に紅潮させ、彼から目をそむけてしまった。

「マリス……朝くらいノックをしてくれよ」

彼は呆然と立ち尽くす侍女を見つめていた。その視線がどうにも痛々しく感じられたのか、侍女のマリスは顔をうつむけて、「申し訳ありません」と小さな声で言った。

その声はあまりに小さく、聞き取りにくかった。だが、彼にとつてそれは慣れっこだ。

「まあ、いいさ」

「申し訳ございません」

青年とさほど身長の変わらない女中のマリスは、顔を俯けたままもう一度謝った。

マリスは自分の失敗を恥ずかしく思ったのか、青い瞳にうつすらと涙を浮かべていた。

暫く二人の間に奇妙な沈黙の空気が流れる。白い肌をほんのりと赤らめたマリスは恥ずかしそうに、青年の顔を見つめる。

そんな表情で見つめられると、彼にはどうにも責めたりすることなどできはしない。この侍女は天から与えられた、そういう才能を持っている。そうでなければマリスがこの厳しい侍女の世界で、生き残れるわけがない。

そんな事を考えながら、青年はマリスの艶のある金色の髪の毛を見つめていた。

首にかかるかという所で、綺麗に切られている髪の毛には清潔感があり、少年の髪の毛よりも幾分か細い。

「あの、ウィツシュ様？」

マリスの声に気付いたウィツシュと呼ばれた青年は、すぐに笑みを浮かべて彼女の目を見た。

「なんだい？」

「あの……タオルと、その、お着替えをご用意致しましたので」

「ありがとうございます」

ウィツシュが一言礼を言えばマリスは、頬を紅潮させて下を向いてしまう。

(礼を言われるのがそんなに恥ずかしい事なのか?)

そう疑問を持つウィツシユは、いつか必ずマリスにそのことを問い詰めてみようとおもっている。

ウィツシユのベッドの上には綺麗にたたまれた衣服と、レザージャケットとベルトがおいてあった。仕事だけはきちつとしているのは、侍女として当然である。

ウィツシユは早々と服を着おえると、レザージャケットをマリスに託して洗面所に向かう。誰にも会うことなく洗面所の前まで来ると、ウィツシユはマリスを入り口に待たせてから中に入る。

洗面台に置かれた洗面器には、井戸から汲まれてきたばかりの水が入っている。その側には白いタオルが置かれていた。

洗面器に汲まれた水に手をつけると、そのまま両手ですくい上げて水で顔を洗う。

ウィツシユは水の凍りつくような冷たさで、改めて目を覚ます。

「マリス、いつもすまないね」

彼女はウィツシユの身の回りの世話をしている。井戸の水汲みからタオルの用意まで、全て彼女がやっているのだ。

ウィツシユの住んでいる館には他にも数人の侍女がいるが、主に彼の身の回りの世話をしているのはマリス一人である。

「い、いえ。そんな、当然のことをしているだけですから」

マリスは少しどもりながら答える。

そんなマリスの当然の答えにも、ウィツシユは一人微笑を浮かべていた。顔を洗い終えたウィツシユは、用意されていた白いタオルを手に取り、顔をうずめた。

「やっぱり、朝はこうでなくちゃな」

シルクの柔らかさを顔に感じつつも、腕の微妙な痛さに顔をゆがめた。

体中が悲鳴を上げたのがちょうど一週間前の今日、そして、ウィツシユが憧れのハンターとしての証のバッジを貰ったのが、同じ一週間前の今日である。

ウィツシユはつい最近までハンターとしての訓練を受けていた。

地獄のような六ヶ月、その日々に何人の仲間が脱落したのかは覚えてはいない。

仲間の事を考えられる余裕などウィツシユにはなかった。

他の者も大概は同じで自分のことで精一杯だった。

ただ一人を除いて……。

『ウィツシユ、いや、みんな私の上にはいかせないし、いけないわ』彼女の言葉が幾度となくウィツシユの頭の中を駆け回っていた。

甲高く頭に響く声質もあつてか、その女性の言葉がどうしても彼の頭を離れなかった。その言葉の通り、彼女は成績トップで訓練を終えていた。当のウィツシユは微妙な順位で、訓練を修了している。

「結局シャーリーには敵わなかった……」

ウィツシユは溜息をついた後、洗面所の入り口に向かう。出口には片手剣とレザージャケットを持ち、ウィツシユが出てくるのをマリスが待っていた。

「ウィツシユ様のご希望通りになればいいですね」

彼女はそういって、満面の笑みを浮かべながらレザージャケットを差し出してきた。

それをウィツシユは「そうだね」と一言だけ優しく言葉をかけて、レザージャケットを受け取る。

「それはそうとその剣はどうしたんだい？」

ウィツシユがレザージャケットを着ながらマリスに尋ねる。すると、彼女は笑みを浮かべてから答える。

「私がウィツシユ様に合う剣を探して、買っておいたんです」

何も装飾のない一見地味な剣、ウィツシユはその剣を無言でマリスから受け取ると、鞘から抜いてみた。銀色に輝く刀身は装飾がなくとも、それだけで十分に高価なものであることが一目でわかる。

肉厚な刃とは裏腹に、切れ味もよさそうで、何よりも手にピツタリと合うのだ。

ウィツシユはその剣を幾度か素振りして、再び鞘にしまう。

「この剣いいね。手にしっかりフィットして、重すぎず軽すぎずで、

本当に丁度いいよ」

「喜んでいただけると、悩んで買った甲斐もあります」

マリスは満面の笑みを浮かべる。

「これならどんな敵が襲ってきたとしても、難なく倒せるな」

ウィツシユは笑みを浮かべて、マリスの方へと目を向ける。そこにある彼女の表情は、なぜか真剣なものへと変わっていた。

「油断は命をとることになります。だから、冗談でもそんなことは言わないでください」

いつになく強気な表情でマリスは、ウィツシユに対して言った。

彼はそれに苦笑を浮かべて答える。

「分かっている。稽古のときのことには忘れないよ」

ウィツシユはそう言うと、受け取った自分の剣を腰に着け、玄関のドアに向かい歩き出した。

「いつてらっしゃいませ」

ウィツシユはマリスの声に一瞬動きを止めてから、振り向いた。笑顔を浮かべた彼女がウィツシユの目に映って、思わずウィツシユは頬をほころばせた。

「きつと、希望通りになるさ」

ウィツシユはそう言って、玄関口より歩みだしていた。

訓練を終えた新人ハンターがドリークのフロイワ支部に行って、一番にやらなければいけないことがある。それが一年間新人ハンターの面倒を見てくれる、中堅ハンターたちの確認である。

卵から孵ったばかりのひよこ同然のウィツシユたち新人ハンターは、何よりも経験が足りない。そのため、ドリークでは新人には一年間、すでに活躍している先輩ハンターと共に仕事に出なければならぬ。というふうに定められているのだ。

ウィツシユはその先輩ハンターの決定が、自分が希望しているハンターになることを願っていた。

その希望しているハンターというのは、最近フロイワで話題になっている美人ハンターコンビである。貴族出身でその容姿も大変美

しいと評判のハンターだ。

その名前、一人はエナ・ニコラス、もう一人がレイア・サンダソンという。

ウィツシュは一人胸を躍らせ、露店が開き始めた目抜き通りを歩みだしていた。

第一章 新米ハンター 2

(神さまがいるなら、今すぐにも助けてほしいもんね)
心の中で愚痴りながら、薄緑の髪の毛の女性が細い路地を走っていた。

細く曲がりくねった道の端には、毛布を被る浮浪者に、雑然とした鼠のうろつくゴミ溜めがそこかしこにあった。

路地を走る彼女の足取りは軽い。腰にぶら下げたサーベルが、かちやかちやと音をたてる。しかし、その音を追う無数の足跡が彼女の背後に迫っていた。

「このクソアマ！ ゆるさねえぞ！」

男たちが後ろから怒鳴りながら、剣を揺らす音を立てて、彼女を追いかけているのだ。

「そんなこと言っても知らないわよ。あんたたちがいかさまするかから悪いんでしょ！」

女性もまた男の声にこたえて、足を止めることなく走り続けた。

そもそも、追ってきている男達に対して何も悪い事をしていない。そう考える女性はちらりと後ろを見た。

やはりと言っていていいが、十人近い数の男たちが彼女を追いかけてきている。

ことの始まりは彼女が街の中にある歓楽街で、賭け事をして時間を潰していたことからからだ。

ゴミだめに等しい酒場にもすでに行き慣れていた彼女は、行きつけの酒場でいつものように店員に酒を頼んでいた。

一日の疲れを癒すという意味もあるが、その日の酒はそれよりも一週間に及ぶ安仕事を引き受けてしまったという自棄酒的な意味合いのほうが強かった。

酒場には荒くれもの飲兵衛から、軍人、役人、細工職人、大工と

ありとあらゆる男たちが通いつめている場所である。

そんな中、一人酒を飲む女性が、男たちの目に留まらないわけがない。

酒場には合わない高貴さはどうしても消しようがなく、いつものように彼女のもとにはなんば男共が群がってくる。

空いている席に座ってもいいかと聞いてくる男たち。それを軽くあしらうのも彼女の日課となっていた。よさそうな男がいれば席に座らせる。それが彼女のやり方なのだが、今回は違った。

凍てつく寒さで外は雪がちらついている。にも関わらず、上半身裸のいでたちの男が彼女の前の席を断りなしに座ってきたのだ。

彼女としては格好をきめた優男よりは、多少筋肉質でなおかつそれをひけらかさず隠していて無口な男の方が好みなのだが……。

彼女の前に座った男は、度を越していた。

彼女を威圧するような分厚い胸板に、胴体と頭を結ぶ首は太く血管が浮き出ている。何よりも、太く鍛え上げられた腕はムキムキと表現するよりは、ガチガチと言う表現の方がさまになっている。

彼女の前に座った男は肉体を自慢し、女性を落とそうとしているらしい。だが、彼女にとってこんなガチガチマッチョは、生理的に受けつけない。

少なくとも普通の女性ならば、すぐに断りを入れるか逃げてしまう。そんな男が彼女の前に座っているのだ。

彼女はそんなことを考えつつ、一切その考えを表情に出すことなく、なかば苦笑を浮かべつつその男を見つめた。

「なあ、譲ちゃんよ、俺の体をみてどう思うよ？」

いきなり席を分捕ってきた上に、最初の発言がこんなでは女も寄ってはこないだろう。さらにいうなれば、近付きたがらない。

その存在に嫌悪感を隠し切れず、彼女は鋭い視線を男に突き刺した。

「あんたみたいにガチガチに鍛え上げた体、正直いうと精神的に受け付けないのよね」

彼女はそう言って顔から笑顔を消して、殺気を帯びた固い表情を浮かべる。そんな女性の態度を見て、大男は怒るところか、口をあけて酒場中に響くほどの大声で笑った。

「気に入ったぞ小娘、俺を前に本心を言う女は見た事がない」

ランプの灯りを反射する頭とは対照的に顎鬚を生やしている。その顔は一度見れば忘れられはしない。その汚らしい口からアルコール臭を漂わせ、続けて彼女に対して言う。

「俺と賭けをしないか？」

呆気にとられていた彼女は、その豪快な態度に苦笑を浮かべてこたえた。

「賭け？」

「そう。おれが勝ったら一晩付きあう。負ければここでの酒代を持つ上に一千ガルの金をお前にやる。どうだ簡単な話だろ？」

女性はもともと金にはガメツイ性格だ。彼女自身それを自覚している。だが、負けたときの条件が気に食わない。こんな男と一晩を過ごすのならば、舌を噛み切って死んだほうがましだ。

だが、残念なことに彼女は今現在お金に困っているのだ。

それに加え一千ガルとなると相当な金額になる。このフロイワの貴族が住む第一区画の一等地に、家を一つ建ててもお釣りがくるほどだ。彼女自身、勘は冴えているほうだと自負している。

(酔いは回っていない。それに負けた時のことは何も考えない)

女性はそう自分に言い聞かせ、男を見る。

「いいわ、その賭けやってやるうじやないの」

女性は服の袖を捲り上げ、白くそれなりに細い腕を見せ付ける。

そして、笑みを浮かべて大男をみた。大男もまた不気味な笑みを浮かべて彼女を見つめていた。

「よし、決まりだ」

男は笑みを浮かべて答えたあと、ポケットからサイコロを二つ取り出す。

六面ある四角形のサイコロを使う、グイデイシュ王国の首都フロ

イワで最も盛んに行われているゲームだ。

そのゲームとはコップの中で二つのサイコロを入れて転がし、出た目を言い当てるといふ単純なものだ。一セットで二回ふり、予め決めておいた先攻と後攻で言い当てていき、近い数のほうが勝ちというものだ。

言い当てた数が多ければ勝ちで、大男はそれを5セットしようと提案してきた。

女性も断る気にはならなかったのでも承する。

その時点で彼女は薄々感づいてはいた。

“何かが匂う”と……。

大男は後ろにいた仲間の男を呼びよせ、その男にサイコロを渡した。

仲間の男は大男とは対照的に細身で、短い髪の毛を逆立たせ、細い目はつりあがって常に笑顔を作っているようにも見える。

そのつり目の男はコップを取り出して、受け取ったサイコロを入れてころころと転がします。

「勝負は公正でなければな。俺が振ったんじゃ公正さがないからな。先攻と後攻、どっちを選ぶ？」

大男は不気味な笑みを消し、真剣な面持ちを保つ女性を見つめた。「私は後攻で」

彼女が言っていると、大男はつり目の男に首で合図して駒を振らせた。

カラカラという音がコップの中で響き渡り、ちょっととした緊張感が二人を包み込んでいた。最もこの時そう思っていたのは彼女一人だった。

木のテーブルの上でコップが引っくり返り、中で音を立てていたサイコロが音を止めて静寂な空間を作り出す。

大男は笑みを浮かべながら、数字を言った。

「9だ」

ゆっくりとコップが開き、数字を見せた。

コップの中の数字は右のサイコロが4、左のサイコロが3だった。

合計の数は7だ。

2の差は小さく感じられるが、実は意外と大きいもの。彼女もまた男に視線を送り、サイコロを振らせた。

テーブルの上をドンと叩く音と共に、音を立てていたコップは静まり返る。

「5よ」

コップの中の数字は3と2、そう文句のつけようがなく、ぴったりの数字をたたき出していた。

女性は満面の笑みを浮かべ、一千ガロンに近付いたことに喜んだ。しかし、大男は表情を一変させることなく、笑みを浮かべ続けた。

幾度となく繰り返されるサイコロ振り、振られるたびに彼女は数値を言い当てていく。だが、大男は焦った表情さえ見せず、それどころか相変わらずの笑みを浮かべていた。

妙につきすぎている。いや、出来過ぎている。

そう思わざる終えない状況の中、ついに彼女の読みが外れる事となる。

「12だ」

大男は笑みを消して、サイコロの数値を見た。

あたるわけがない。そう踏んでいた彼女だが数値をみて驚かされた。サイコロは二つとも6を出していたのだ。

「俺の一方的な攻めを受けてくれる女を意地でも欲しいからな」

「あら、そう」

苦笑を浮かべる女性はつり目の男を見つめ、数字を大きな声で言った。

「8よ！」

コップがテーブルを叩き、ゆっくりとコップが開き始める。

一瞬の静寂の中、一つ目のサイコロが見えた。一つ目の面には5がついている、そしてもう片方の目は5であった。

女性は小さく嘆息してから、気を取り直す。一度くらいのはずれ

があってもおかしくない。彼女はそれが運であり、賭け事であると考えているのだ。

しかしその後も出る目はことごとく外れていき、あっという間に大男に2セット取られてついに並ばれてしまっていた。

「ついてないなあ」

最終セットが幕をあげたときには、女性の酔いは完全にさめていた。それどころか彼女の全身に悪感が走っていた。

このセットを取られた時に彼女は、見ず知らずの大男に蹂躪されるということを約束してしまっているのだ。酔いが醒めるのも当然である。

正に勝てば天国、負ければ地獄だ。

「じゃあ、ふつてくれ」

大男の声と共に、つり目の男はサイコロをコップに入れ、シェイクさせる。

なぜかそのつり目の男の口元も微妙に緩んでおり、それが彼女の悪感を増大させた。

前回の二セットはストレートで負けた。しかも、二つともサイコロの目をきつちりと言いついて。その前は彼女がサイコロの目を全て言い当てて、ストレート勝ちしている。賭けとしては面白いし、できすぎている。

このゲームで目を言い当てることなどそうないこと。これだけ目を言い当てることは逆に不自然なのだ。

釣り目の男と目の前に座る男が吊るんでいる。女性の中で彼らがいかさまをしているという疑惑が、固まりつつあった。

「7だ！」

大男の声が女性の耳に届いて、彼女は机に目をやった。コップはゆっくりと開き、中のサイコロは見事に7を出している。

「さて、讓ちゃん、一つ付き合ってもらおうか」

女性のコマを振る回が残っているにも関わらず、男は下品な笑みを顔いっぱい浮かべて言っていた。

「まだ私の番が残ってるわよ？」

「ふん、どうせ負けさ」

男の言葉に女性の中にあつた疑惑が、限りなく黒になっていく。だが、彼女が抗議したときにはいつの間にか、周りには見ず知らずの男どもが群がってきていた。

非常に不味い状況になっている。女性は動じずに立ち上がり、つり目の男を指差して大声で叫んだ。

「あんた、イカサマしてたでしょ」

女性はコマを振っていた釣り目に対して、疑惑をぶつけた。

釣り目の男は一瞬目をそらした後、「何のことやら……」と「笑って首を振る。しかし、彼女も伊達に人と付き合ってきてはいない。嘘はすぐに見破れる。」

特に男の嘘は……。

「じゃあ、その右手に持つてるものは何かしら？」

サイコロ二つは机の上にあるコップの中、釣り目の男の右手は常に何かを握っていた。

男は少し動揺した後、何か言い訳をしようとした。だが、それよりも早くに女性が動いた。女性は男の前まで行くと、右手をひねり上げ、手を開かせたのだ。床に淡白な音を立てて落ちるサイコロ、その光景は、周りの男どもに隠され、店内にいるほかの客からは見えなかった。

しかし、イカサマをしていたのは事実だ。

女性は釣り目の男の手をひねり上げた状態のまま、腰にあるサーベルの柄を握り締めてサーベルを抜刀していた。そしてそのまま柄で、釣り目の男の顎を殴りつける。

つり目男は床に頭から倒れこむ。鈍く光るサーベルの刃を見た男達は、その場で後ずさった。さすがの男たちも凶器を目の前にしてひるんだ。

「馬鹿野郎どもが、たかが女一人になにひるんでやが！」

彼女の前に座っていた男の一喝に、怯んでいた男たちは気を取り

直す。目の前にいるのは、娘一人にすぎないのだ。

男たちが気を取り直し、女性に飛びかかるうと、態勢を整えようとする。だが、それも全てが手遅れだった。

女性は目の前にいた二人の男を流麗な身のこなしで、つり目の男と同じようにサーベルの柄で殴り伏せていく。

二人の男を殴り伏せた彼女の前に残ったものは、逃げ道だけだ。

ブーツでイカサマをしたつり目の頭を踏みつけ、そのまま走り出す。そのあとをすぐに男たちが続いて走り出した。

店内は騒然としていたが、幸い女性の邪魔立てをするような輩はいない。店の出口まで一直線に走り抜ける。

「お釣りはいらない！」

女性は酒場の入り口にあった会計所にいた店員に、小銭袋を投げつけて走って店から出て行く。そのあとをあの手で筋肉質な男とその手下たちが、急いで追っていく。

（どうせ、大した額の酒を飲んだわけでもなし、小銭袋にはこの安酒十杯分はある）

そんなことを考えつつ、彼女は狼どもから歓楽街の道を駆けていった。

「まったく、ついてない……。無駄な時間を過ごした上に、わけのわからん輩に追われるはめになるなんてね」

女性は走りながら大きく嘆息して後ろを振り向く。やはり、ちゃっかりと後ろを男どもが追ってきている。

既に太陽が昇り始めているというのに、諦めもせず執拗に追ってきていた。まるで、ハンターに追われる獲物になった気分だ。

女性はそう思うと皮肉に思えて仕方がなかった。彼女の職業は獲物を追う側のハンターなのだ。

裏通りの細い路地の出口を見つけ、彼女はそこに駆け込んでいた。路地に入ると明かりが差し込み、まるで彼女を天国へ誘い込むように輝いていた。

「大通りへの出口か……。出せば親衛隊もいるし、こっちの

もんか」

彼女は独り言を呟きながら、裏路地の出口目指して走るスピードを速めた。

ゴールはすぐ目の前だ。何事もなく、眩い明かりが目にし込み、新鮮な空気が肺一杯に入り込んでくる。そして……。

勢いよく何かにぶつかり、ずっこけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5049z/>

Millennium of Vengeance 噂の美人ハンターコンビ

2011年12月17日02時06分発行